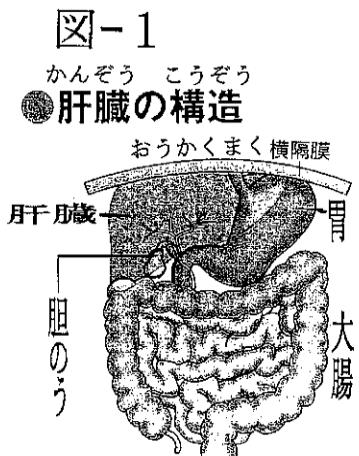
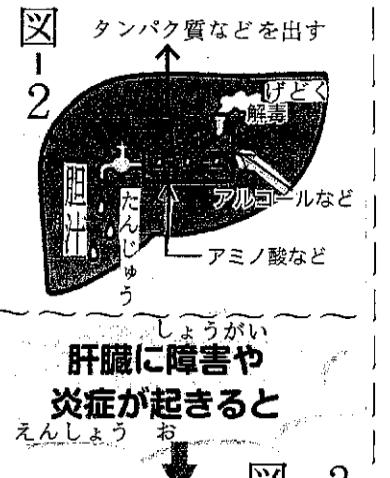
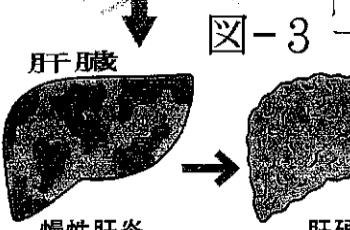


H.29(2017)年8月、願成寺



肝臓に障害や炎症が起きたとき

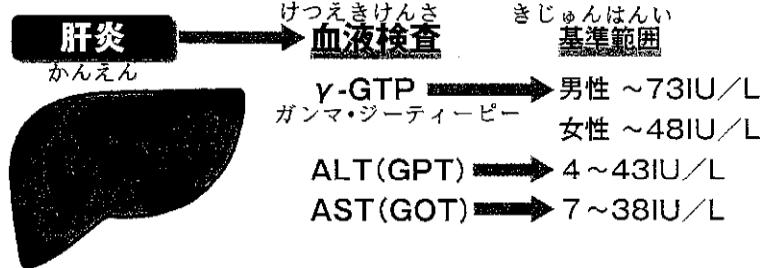


●肝臓の炎症が続くと慢性肝炎になり、そのままの状態が続くと肝臓の組織が硬くなり、肝硬変になりやすくなる。肝硬変をそのままにしておくと、肝臓ガンになりやすい。慢性肝炎から直接・肝臓ガンになることもある。

図-4 肝臓病の検査

まず会社や自治体で行われている健康診断で血液検査を受ける。検査値に異常があった場合は、画像検査などさらに詳しい検査が行われる。

※基準範囲は武藏野赤十字病院の例(2016年3月現在)。基準範囲は検査機関・医療施設によって異なることがある。



肝機能の状態がわかる基本的な数値は上の3つ。基準範囲内の数値でなければ、肝炎を起こしている可能性が高い。

○肝臓は、お腹の上・右の肋骨の内側にあり、人体で最大の臓器で約1kgです。肝臓は『人体の化学工場』と言われ、①アルコール(酒)・薬など、有害物を分解・解毒する、②食物中の栄養素から、体に必要なタンパク質やコレステロールなどをつくる、③食物中の脂肪の消化を助ける胆汁を作る(胆囊に貯蔵)、などの働きをします。

●肝臓病は、(1)肝炎ウイルスA・B・C・D・E型など(2)アルコール・メタボ・肥満などで、(3)薬などで、肝障害・慢性肝炎・肝硬変などを起こします。肝臓は『沈黙の臓器』と呼ばれ、健康な人の肝臓は約30g/Lが働くだけで、余力があり・肝臓病になつても自覚症状がありません。

■脂肪が貯まる脂肪肝や、ウイルス性肝炎の一部は慢性肝炎になり、これが進むと肝硬変に、さらに肝不全になり、これが進むと肝硬変に、さらには肝不全になると腹水が現れ、肝臓癌にもなります。

※自覚症状が現れない肝臓の状態を知るのに、有効で簡単なのが血液検査です。肝臓病になると肝臓の中の物質が血液中に漏れ出し・この量と種類を測ると、肝臓病の程度が分かります。

▲ウイルス性肝炎・脂肪肝・慢性肝炎を調べる項目 γ -GTP・ALT・ASTの3つが調べられます。ALTの方が高いと脂肪肝・慢性肝炎などが疑われます。普通、ALTの値はASTより低いが、ALTの方が高いと肝硬変の疑いがあります。ALTの値が低いと肝硬変を調べる項目・血液凝固能・血液小板・出発時に血液を固め止血します。値が低いと肝硬変の疑いがあります。血液凝固能は、血液を固める力で、肝臓は血液凝固物質も作るので、この値が低いと肝硬変か?アルブミンは、血液中に最多のタンパク質で、肝臓の働きが低いと値が低下します。ビリルビンは赤血球が壊れてできる黄色色素で、この値が上がると黄疸になります。肝臓の働きも下がります。自治体や会社の健康診断での血液検査で γ -GTP・ALT・ASTの3つが調べられます。異常があれば、詳しい検査を受けましょう。